

朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の金日成主席（朝鮮労働党総書記）の十四年ぶりの中国訪問は、ベトナム、カンボジアを含むインドシナ情勢の流動化にタイミングを合わせた、この論調が多い。その見方で欠けていると思われるのは、ことしの秋、フォード米大統領が中国を訪れることとの関係である。

アメリカは、議会がこれまで以上に孤立化する方向をめざし、アジアへの援助を引き上げている。このうちで、朝鮮半島の問題はホッパな論点ではなかったが、しかしこうした東南アジアをめぐる国に出ている。

その点、国際情勢の動きがまぐるしい中で、両国の首脳の話しても、北朝鮮は、かつては中国を

朝鮮半島では、アメリカ側は、東南アジアからの撤退の一方で、韓国には（援助）を増強する方向が

いま、中国と北朝鮮双方に懸案が多い。だからこそ、この時期に話し合いを持ったとみてよい。中国側の歓迎ぶりは、異例といえるほどはなやかだった。裏をかえせばかなり問題があったからこそ、と思われる。

北朝鮮側の代表団の中に軍関係者が目立つのは、インドシナ情勢にからみ軍事情勢が大きな課題だからだろう。しかし、経済関係も含むフルメンバー的な顔ぶれであり、やはり東アジアの諸問題を広く話し合うのだろう。いずれにしても東アジアがどうなるかという点で重要な意味をもつ今回の訪中である。（東京外国語大助教・藤）

# 金日成主席訪中の背景

中 嶋 嶺 雄

## 米大統領訪中控え意思疎通

ことしの中国外交にとって、フォード訪問は、大きな問題だ。これをどうするかで中国側はいろいろ考えている。鄧小平副首相のフランス訪問もそのひとつであろう。

し、潜在的にはいちばんむづかしい問題だと思つう。

インドシナ半島については、

際情勢の中で、フォード大統領が訪中して中国との国交回復にまでいけるかどうか。仮にできるとすれば、大國間のワケ組みをアジアでつくることになり、朝鮮半島の固定化の方向にいく。そこで北京

合いがもっとあってよいはずなのに、これまで深い接触がなかつた。近いところでは七三年に、許

批判したこともあり、金日成主席が北京へ行ったからといって中国寄りになることはおそくないだろう。方、北ベトナムでは、ソ

このころ、インドシナ情勢は流動化している。台湾の蔣介石氏の死去があった。中ソ対立がい

と感していたようだ。ところが、

固定化の方向にいく。そこで北京

合いがもっとあってよいはずなのに、これまで深い接触がなかつた。近いところでは七三年に、許

批判したこともあり、金日成主席が北京へ行ったからといって中国寄りになることはおそくないだろう。方、北ベトナムでは、ソ